

# 世界文学としての『苦海浄土』

—石牟礼とウルフ—

榎 本 真理子

## *Kugai Jodo (Paradise in the Sea of Sorrow)* as Universal Literature : A Comparison with *To the Lighthouse*

Mariko Enomoto

### Abstract

Michiko Ishimure's *Kugai Jodo* is often regarded solely as a documentary of Minamata Disease and its trials. The worth of the novel however goes far beyond this characterization. As Kyouji Watanabe correctly points out, it is quite appropriate to call Ishimure's novel a piece of universal literature. According to Natsuki Ikezawa, universal literature is that which helps readers understand essential features of the world and human beings. For this reason, Ikezawa included Ishimure's work as the only novel from Japanese literature in his collection of the world literature. However, in Japan, her novel has been criticized as "mere reportage," since her writing style is outside the orthodoxy of modern intellectual Japanese literature. Nonetheless, her effort to represent the reality of the inner world of "primitive people" in modern Japan, allows her work to come close to the greatness of James Joyce, Gabriel García Márquez, and in particular, Virginia Woolf.

**Keywords :** Universal Literature, *Paradise in the Sea of Sorrow*, Criticism of Modern World, *To the Lighthouse*.

キーワード : 世界文学, 『苦海浄土』, 近代文明批判, 『灯台へ』

## 1. 初めに

### (1) 石牟礼道子とヴァージニア・ウルフ

『苦海浄土—わが水俣病』<sup>1)</sup>(以下『苦海浄土』と略記)のすぐれた批評書のタイトル『近代への呪術師・石牟礼道子』が指し示しているように、『苦海浄土』はフクシマ同様、文明の犠牲となった水俣の土俗的・アニミズム的な暮らしへの鎮魂歌である。一方ロンドンという都会をこよなく愛し、時代の最先端を生きたヴァージニア・ウルフの *To the Lighthouse* にも実は「父の掟の支配する以前の世界」、すなわち土俗的なものへの深い憧れが垣間見える。近代小説の伝統を逸脱した表現方法によって、世界と人間の本質を表現し得ている点も両作品に共通である。この小論では『苦海浄土』が世界文学としての資質を十分に備えていること、又ヴァージニア・ウルフの作品とも共通点があることを論証する。

### (2) 世界文学とは何か

池澤夏樹個人編集による世界文学全集には、イギリスからはコンラッド、ウルフらの作品が入っている。日本の文学で唯一この全集に収められているのが『苦海浄土』である。現代の世界文学を池澤は「国ではなく、世界そのものを直接理解できるような資質を持った作品」(池澤 14-15)と定義している。

20世紀にはポストコロニアリズムとフェミニズムが大きくクローズアップされた。これらに関係ある文学がなぜ面白いかについては「本当に言いたいことがあるからであり長い間弱者として虐げられてきたがゆえの思いを、単なるルサンチマンではなく、表現を鍛えたうえで普遍性につながるようにして書いているからだ」(18)というのが池澤の解説である。

現在では9.11以降の、そして3.11以降の世界を文学はどう説明するのかも問われている。3.11や水俣病の問題を踏まえれば、近代あるいは人間の物質文明についての検証・見直しも世界文学の大切な要素に含まれることになるのである。

## 2. 『苦海浄土』紹介

### (1) 石牟礼道子とは

石牟礼の育った精神風土を知るには『椿の海の記』が役に立つ。チッソコ

と新日本窒素株式会社に破壊される以前の水俣の美しい暮らしがそこには描かれている。

梅雨の雨がしぶく山中だとて、子供たちはいとわない。山の本のさまざまというものは、それほどに小さなものたちの魂を呼び寄せる。サセッポの実や、くわくわらの実や、野葡萄の実などというものが「山のあのひとたち」つまり猿たちや狸や狐や、山童たちをも呼び寄せるように。

「山に成るものは、山のあのひとたちのもんじゃけん、もらいにいたても、悠々とこさぎ取ってしもうてはならん。カラス女の、兎女の、狐女のちゅうひとたちのもんじゃるけん、ひかえて、もろうて来<sup>け</sup>」

おもかさまがささやくように、いつもそういう。(17)

しかしその美しい世界は、主に天草からやってきたよそのたちが港や道路を作り、やがて道沿いに町が大きくなり、娼窟が出来た土地でもあった。女郎屋の末広の姉様たちは石牟礼にも、精神を病んだ石牟礼の祖母おもかさまにも優しくった。気品が高いと評判の16歳の娼婦ぼんたは、末広に来てほどなく幼馴染に殺された。わけあって売られてきたその裏若い女郎は「息の切れる間際にたったひとことおっかさあーん」(98)と言って死んだ。あわれと思ってぼんたの解剖に立ち合ったのは「なんのかかわりもなか土方の俺」、亀太郎こと石牟礼の父ひとりだった。亀太郎はぼんたをあわれに思って焼酎をあおりつつはらはらと落涙し、石牟礼に「ほら、みっちん、お父つつあまにつげ。おまやけっして淫売のなんのにゃ売らんけん、しあわせぞ。いっばいのめ、のむか、うん」(103)と4歳の娘に焼酎を飲ませる。しかし石牟礼は年端もゆかぬ子供の身で、腰巻とチャンチャンコを風呂敷に包み、すでに母の春乃に「末広に、いんばいになりゆく」(204)と告げていたのである。優しい末広の妓たちを慕い、そのため大人たちが「淫売」という語をどのようなニュアンスで言うかによって、その人たちへの好き嫌いを決めていた石牟礼にとって、それは「自分に対するシニシズム」(205)の表白だったという。

おもかさまは、「神経<sup>どん</sup>殿」と呼ばれていた石牟礼の祖母で、精神を病んで目も見えなくなっている。蓬髪で破れた着物のままだこへともなく漂流く。孫の道子がつれ戻しに行くと「みっちんかい」とおとなしく手を引かれて帰

るのである。それでいておもかさまは漬物の漬け込みの時期の微妙な加減などは誰よりもよく知っていて、皆に正確に教えるのであった。この人は石牟礼の母が10歳の歳に精神を病んだのであり、石牟礼の母はたった10歳で「自分が親にならねば」と思ったのだという（石牟礼・多田 29）。

石牟礼の祖父松太郎は道路を作る人であった。チッソが水俣に來たときに天草から出て来て、チッソの積み出し港をつくった。大正半ばのことである。石を扱うことにかけては天才肌の祖父は、しかし経済観念には疎い人であった。いい加減な道路作りをしては末代までの恥だとばかり、持てる財産をつぎこんで道路請負事業を続けるが、やがて「[道に] 食わせる山が無<sup>の</sup>なって」百姓になる。その過程で祖母の心が破綻したのは、機織りだけが好きだった祖母に人夫衆のまかないなどの仕事が向かなかただけでなく、祖父の妾宅通いも原因のひとつだったという（多田・石牟礼 31）。

石牟礼は、三重の意味でよそものであった。水俣の地によそからやってきた家族の一員であったこと、女であったこと、そして「神経殿」ことおもかさまと仲がよかったことである。住民として、ジェンダー的に、そして精神的によそものだったのであり、そのことが石牟礼の感性と言葉の力を一層強め、「呪術師」としての資質をはぐくんだのである。石牟礼がたった4歳でおいらんのみちゆきを決行した（『椿の海の記』206-207）ことを思えば、「この世界からどうしても意識が反りかえってしまう幻視者の眼」を持つ（渡辺 31）ことが作家石牟礼が『苦海浄土』を創り上げる上で最も大きな影響を及ぼしたことと思われる。

## （2）『苦海浄土』の構成

『苦海浄土』の第一部「苦海浄土」は1968年に出版された。第二部「神々の村」は1970年、『展望』に連載が開始された。第三部「天の魚」は同じく『展望』に1972年から連載され、1974年に本の形で出版された。第二部の完成には更に時間を要し、2006年に出版された。40年の歳月を経て完成した、三部作の核心である。渡辺によれば『『第二部』はいっそう深い世界へ降りてゆく。それはもはや裁判とも告発とも関係のない基層の民俗世界、作者自身の言葉を借りれば『時の流れの表に出て、しかとは自分を主張したことがないゆえに、探し出されたこともない精神の秘境』』であるという（渡辺 167）。

水俣は地名が病気の名前に使われてしまった気の毒な例でもある。この地

域の繁栄は新日本窒素肥料会社の存亡にかかっていた。そのため、「患者111名と市民4万5千人とどちらが大事か」と、14年にわたって水俣病に触れることはタブーとなっていたのである。この本はしばしば水俣病裁判の記録と勘違いされるが、決してそれだけではない。胎児性水俣病の孫と世話をする老人とのユーモラスなやりとりや、漁民たちの美しい生活とそれが失われた悲しみも描き出されている。その例を『苦海浄土』からいくつか引用しよう。

おるげにゃよその家よりゃうんと神さまも仏さまもおらすばって、空よ  
い、お前こそがいちばんの仏さまじゃわい。爺やんな、お前ば拝もうごた  
る。お前にゃ煩惱の深うしてならん。

あねさん、こいつば抱いてみてくだっせ。軽うござすばい。木で造った  
仏さんのごたるばい。よだれ流した仏さまじゃばって。…

話の途切れ目でもないのに、がくんと頭をたれて眠ったりする爺さまの  
腕と、組んだ膝の間から、少年は自分の体がずり落ちないように、背中を  
わずかに曲げたりずらしたりしているようだった。というより、彼はそう  
やって、爺さまをあやしているといったほうがよい。(118-119)

話を聞きに行った石牟礼に、江津野老人は孫の世話をしながら話しかけ  
る。彼は話をしながら眠りこけ、膝に抱かれた孫の空太郎はそれを察してず  
りおちないよううまく体の向きを変えるのである。

次は江津野老人の若かりし頃の話である。小さな船に夫婦二人で乗って漁  
をする。帆船なので風が止むとどうにもならない。それで焼酎でも飲んで風  
の吹くのを待つのである。

かかよい、飯炊<sup>まき</sup>け、おるが刺身とる。ちゅうわけで、かかは米とぐ海の水で。

沖のうつくしか潮で炊いた米の飯の、どげんうまかもんか、あねさんあ  
んた食うたことのあるかな。そりゃ。うもうござすばい、ほんのり色のつ  
いて。かすかな潮の風味のして。

そこで鯛の刺身を山盛りに盛りあげて、飯の蒸るるあいだに、かかさ  
ま、いっちょ、やろうかいちゅうて、まず、かかにさす。

あねさん、魚は天のくれらすもんでござす。天のくれらすもんを、ただで、わが要ると思うしことって、その日を暮らす。

これより上の栄華のどこにゆけばあろうかい。(122-123)

失われたのどかで美しい暮らし、その中で満ち足りて生きることの喜びがひしひしと伝わってくる。その暮らしは上の2(1)の『椿の海の記』からの引用に見られるように、自然と一体化した暮らしであり、タコ壺にかかったタコでさえ、家族のようになるのである。次の「ゆき女聞き書き」からの引用中、「もぞかしい」は「かわいい」という意味である。

舟の上はほんによかった。

イカ奴は素っ気のうて、揚げるとすぐにぶうぶう墨をふきかけよるばってん、あのタコは、タコ奴はほんにもぞかとばい。

壺は揚ぐるでしょうが。足ばちゃんと壺の底に踏んばって上目使うて、いつまでも出てこん。こら、おまや船に아가ったら出ておるもんじゃ、早う出てけえ。出てこんかい、ちゅうてもなかなか出てこん。壺の底をかんかん叩いても駄々こねて。仕方なしに手網の柄で尻をかかえてやると、出たが最後、その逃げ足の速さ早さ、ようも八本足のもつれもせずに良う交して、つうつう走りよる。こっちも舟がひっくり返るくらいに追っかけて、やっと籠におさめてまた舟をやりよる。また籠を出てきよって籠の屋根にかしこまって坐とる。こら、おまやもううち家の舟に아가ってからはうち家の者じゃけん、ちゃあんと入とれちゅうと、よそむくような目つきして、すねてあまえるとじゃけん。

わが食う魚にも海のものには煩惱のわく。あのころはほんによかった。

船ももう、売ってしもうた。(87)

タコ壺でとらえ舟に揚げたタコとのやりとりが、そこはかたないユーモアの漂う筆致で生き生きと語られている。ここではタコは単なる獲物というよりまるで「うち家」の、いたずらですばしこい子どものように描かれている。その美しくも豊かな暮らしが永遠に失われたことを、「船ももう、売ってしもうた」という静かな一行が強烈に印象付ける。

この小説には医師の報告書や裁判記録など公的文書、「わたくし」の文

章、患者やその家族の一人語りの三種類の文体が用いられている。あとの二つはどんなに悲惨な文かと思われることだろう。ところが上の三つの引用にしろ、チッソ本社での座り込みにしろ、どこことなくユーモラスな筆致で綴られ、客観的な目を持ちつつ人々に寄り添ったこの本全体の力となっている。患者やその家族の語りには、石牟礼の本領が発揮されている。単なる語り部というより、まるで人々の魂が石牟礼に乗り移って語らせているかのようなのである。石牟礼自身が「だってあの人が心の中で言っていることを文字にすると、ああなるんだもの」（渡辺・岩岡 371）と語っているのは有名な話である。それは水俣弁とも微妙に異なり、地方色豊かでありながら、誰にでも意味の通じる不思議な言葉で、上野千鶴子はこれを「道子弁」（上野 46）と呼んでいる。

### （3）描かれた水俣病と水俣病裁判

1956年に熊本県水俣市で発生が確認されたことが水俣病の名の由来である。水俣病は環境汚染による食物連鎖により引き起こされた人類史上最初の病気であり、「公害の原点」とされている。海岸地方の猫がまず異常を来とし、次には水俣湾で獲れた魚を多く摂取している人たちが病に倒れた。『苦海浄土』第一部、昭和31年8月29日付の細川一博士による厚生省への報告書には次のように書かれている。

#### （一）症状並びに経過の概観

本症は、前駆症状も発熱等の一般症状も無く極めて緩徐に発病する。まず四肢末端のじんじんする感じがあり次いで物が握れない。ボタンがかけられない。歩くとつまずく。走れない。甘ったれた様な言葉になる。又しばしば目が見えにくい。耳が遠い。食物がのみこみにくい。即ち四肢の麻痺の外、言語、視力、聴力、嚥下等の症状が或いは同時に或いは前後して表われる。これ等症状は多少の一進一退はあるが次第に増悪して極期に達する（極期は最短二週間最長三カ月）。以後漸次軽快する傾向を示すも大多数は長期に亘り後胎症として残る。尚死亡は発病後二週間乃至一ヶ月半の間に起こるようである。（23）

水俣病はメチル水銀による中毒性中枢神経疾患である。メチル水銀が入り込み、脳や神経を破壊し、その結果さまざまな全身症状が引き起こされる。

劇症の悲惨さはハンセン病などと同じ偏見と差別をもたらした。軽症の場合や小康状態になった場合には、金欲しさのニセ患者として差別された。家族は次々と病に倒れ、大学病院で調べてもらっても原因さえ分からない。劇症になると病院の特別病棟に収容され、口もきけず、食べ物を口に運ぶこともままならない。そんな中で人々は或いは釜鶴松のようにじっと恥と怒りを蓄え、或いは坂本ゆきのように自分の震える体を見世物として供し、他の病棟の患者にたばこを恵んでもらったりしてただ死を待つしかない。それでも胎児性水俣病の子供たちは明るく笑っていたりするのである。

### 3. 『苦海浄土』の評価

#### (1) 近代批判

水俣の人々の国の捉え方は単純素朴な勧善懲悪であり、そのために国というものの問題が、かえって鮮明にあぶり出される結果となっている。「補償処理委員会」が始まる前、上京して橋本政務次官に「むごいしうち」を受けて帰って来た坂本マスは「東京にゆけば、国の在るち思うとったが、東京にゃ、国はなかったなあ。あれが国ならば国ちゅうもんは、おとろしか。水俣ん者共とうつつ、がつつじゃった。うんにゃ、また一風ちごうて、まあだひどかった。むごかもんばい。見殺しにするつもりかも知れん。おとろしかところじゃったばい、国ちゅうところは。どこに行けば、俺家<sup>おるけ</sup>の国のあるじやろうか」(307)と述懐する。

裁判所は国で、その国が公害認定をしたのだから、たちまちチツソが呼び出されて患者に謝罪し、きちんと裁きをつけてくれるもの、と人々は思っていた。「芝居や映画じゃなあ。お奉行さまの出て来て、罪人な、へへー、ちゅうてな。ひれ伏すじゃろうがな」ところがそうなるどころか「行ってみたらチツソに弁護士のついとったろうがな。これにゃたまがったばい」

(320) という具合である。公害認定が下ったのだから、患者には「もう心配いらん」と償いが示され、「教育のなか馬鹿もんどもが、死んだ魚食うて成った」と患者たちを憎んでいた水俣市民の憎しみも氷解する、と患者とその家族は思っていた。しかしそうはならないのである。「国というものは…そげんも遠かところにあるもんじやろうか!」(321) というのが、厚生省の係官の作った一方的な確約書に対して「お願い」を作成した患者たちの感慨であった。



石牟礼はまず近代文明の批判者として高く評価された。それは底辺の人間を捨てて顧みない「日本近代のあり方への告発者として」(渡辺 37)の評価でもあった。しかしなかなか文学としては認められなかった。それについて渡辺は「『苦海浄土』が」文学として認められないのは、日本近代文学とは異質な、ひと廻りもふた廻りも広大で、しかも深く根源的な世界を表現しようとしているから。…石牟礼の本質は、近代日本文学がこれまで描こうとしなかった、いやむしろ描くことができなかった世界を、初めて表現にもたらしたところにある」(39)と述べている。その世界とはいわゆる土俗の世界であり「もうひとつのこの世」である。換言すればそれは言語世界に生きていない人々の世界であり、長塚節も柳田國男も外側からしか描けなかった世界である。

自然と共に生きる人々の、のどかな暮らしは、日本の津々浦々で営まれ、今この瞬間にも営まれている暮らしである。同じことが世界中の国々にも成り立つ。そののどかな暮らしは徐々に、あるいは突然奪われてしまうことがある。

我々のなすべきはそれら苦しむ人たちに寄り添うことであると共に、我々自身も加害者なのだという事実を認識することである。直接手を下さないまでも、恵まれた文化的な生活を享受しているという点で実は我々は、様々な公害や原発の災害を引き起こすことに加担していることになるのである。これは正しく石牟礼がこの本の中で述べていることに他ならない。

自然災害については、地球の46億年の歴史の中で、過去数千年が例外的に人間の住みやすい気候・環境だったのであり、現在は変化の激しい、人間が住むのに適さない環境に戻りつつあるに過ぎない(ライト 67)という説がある。我々が快適な暮らしを求めてその流れを加速させているのは事実である。失われた水俣の生活の美しさ、味わい深さを描き出し、それによって文化的生活を営む我々が何を引き起こしたのかを読者に訴えかける。これはそういう本である。

チッソの社員であった岡本達明とプロセス工学の専門家西村肇の共著である『水俣病の科学』という本がある。水俣病について語るときには欠かすことの出来ない書物である。それによるとある時期、会社は「サイクレーター」という、排水をきれいにする機械を設置したからもう大丈夫と言ったのである。しかしそれはまやかしであった。チッソが「排水は完全に浄化され

た」と言い、熊本大学の研究者も「水俣病の発生はもう終わった」と言うので、漁師や住民は安心して再び魚を食べるようになり、食生活は元に戻った。その結果「一九六一年以降、水俣病は第二の発生期に入ったのです。熊本大学の研究班が事態を知って愕然とするのは七二年。十年後に水俣病の研究班が結成され、水俣病の多発部落、三部落、対岸の御所浦島の住民に一斉検診をおこなったとき」(97) だという。池澤はこの箇所を引用したあと、文学の意義を次のように述べている。

現代の社会がどこまで残酷になりうるか、多数のためにどこまでが犠牲にされるか。同じことは、日本だけでなく、高度経済成長を迎えようとしている他の国々でもずっと起こっていること…先進国だってまたそこに戻るかもしれない。つまり、水俣病の苦痛というのは世界中の人間にとって大事な財産…。財産にするためには誰かが書かなくてはいけない。一方的な告発の文章ではなく、…嘆きだけではなくて、人間の生き方全部を含んだ大きなものにしなければならぬ。それができるのはやっぱり文学なんですね。(池澤 2013 29-30)

こうして見てくると、水俣病とフクシマの原子力事故とが如何に似ているかに我々は気付かざるを得ない。これが日本近代の「棄民思想」であり、それはオリンピック招致に向けて「汚染水完全ブロック」を一国の首相が宣言した2013年の現在でもまったく変わっていないこと、それが石牟礼の批判している「日本近代」のありようであることを再認識させられる。

『水俣病の科学』の結語には次のように記されている。「私たちは、心の奥深く一つの言葉が湧いてくるのをどうするすべもありません。『私たちもまた加害者ではなかったか？そしてあなたも』」(323) と。心に重く響く言葉である。

## (2) 文学として

石牟礼は近代小説にはない独特の時間と空間の描き方をしている。現在の中に過去と未来がなだれこみ、錯綜する。空間についても同様である。それは「近代的な不可逆の直線的時間ではなく、循環し交錯し重合する多次元的な時間」であり、「近代的に整序された均質空間ではなく、様々な異質な空間がくびれた通路でつながりあう多次元空間」なのである(渡辺 60, 98-

99)。ここにおいても石牟礼は、ウルフやフォークナー、ガルシア・マルケスなど20世紀以来の実験的な作家と共通点を持つ。それら一見奇矯な時間・空間認識の方法は、実は文学のみの特権ではなく、我々が普通に生きて行く日常の中で日々実践していることでもある。ただ日常の中で時間は直線的に、空間は均質的なものはずで、我々はそのように捉えているはずだ、という思い込みが我々自身の知覚の正確な認識を妨げているに過ぎない。大井玄によれば「外界で見るもの、聞くもの、触れるものが現実を構成している、とヒトは考えている。だが脳は、その知覚することを過去の経験に基づいて組み立てている」と神経生理・心理学教授スティーブン・コスリンはふつうの人間の認知メカニズムについて解説し、また神経科学者マイケル・ボスナーは「知覚が期待によって左右されるという認識は、認知研究の基本である」（大井 96）と言っているのである。また大井玄自身も「わたしの意識を現している心的システムは外的刺激に対応して作動しているのではなく、みずからの産出的作動を反復している」（98）という。我々の心に生起する多次元的世界をそうでないものと見なしているのは我々の常識と思ひこみのなせるわざなのである。

水俣には「もだえ神」が存在するという。それは他人の苦しみをわがことのように感受し、悶え苦しむ世界認識の仕方である。石牟礼は、例えば82号患者、明治36年生まれの漁師釜鶴松の発する恥じらいと嫌悪と絶望と侮蔑の表情に接し、次のように記している。

安らかにねむって下さい、などという言葉は、しばしば、生者たちの欺瞞のために使われる。

このとき釜鶴松の死につつあったまなざしは、まさに魂魄この世にとどまり、決して安らかになど往生しきれぬまなざしであったのである。…

この日ことにわたくしは自分が人間であることの嫌悪感に、耐えがたかった。釜鶴松のかなしげな山羊のような、魚のような瞳と流木じみた姿態と、決して往生出来ない魂魄は、この日から全部私の中に移り住んだ。

(83)

「安らかにねむって下さい」ということは、怒りと悲しみを表現したい人々を都合よく黙らせることであり、その欺瞞性は明らかである。石牟礼はこ

こにおいて死にゆきつつある釜鶴松のうちに存在する怒りを彼に成り代わって描き出し、また「もだえ神」となるべく否応なく召喚されたことを記しているのである。

石牟礼は患者について書き記すとき、伝統的な「観察者」にとどまることを徹底して拒否する。語りのあらゆるところに融けこみ、自身の言葉によって患者の物語を語る。石牟礼は各々の患者と一体化し、患者の苦しみや思い出、彼らにこの世がどう見えているのかを、「道子弁」で語る。このように、患者と一体化する以外に途はないと悟らせたのが、上に引用した釜鶴松との遭遇であった。Kurahashi はこの石牟礼の語りは Trinh T. Minh-ha の言う “speaking to the tale” つまり優越者の立場に立たない語りそのものである、としている (320)。

このようにして「もだえ神」となった石牟礼は、様々な水俣病の犠牲者を描き続ける。外側からの客観的描写のみならず、その人たちの内面、その人たちの視点から、である。その中には山中九平少年がいる。彼はラジオで野球中継を聞くのが大好きで、熊本大学病院に検診に連れられて行くことを「いやばい、殺さるもね」(21)と絶妙な表現で拒否しつづける。すでに引用した坂上ゆきによるタコのエピソードと、胎児性水俣病の子を捨てて出て行った母を恨むな、と言い聞かせて孫を育てている江津野老人の語りもある。田上義春は26歳で発病した劇症患者であったが、奇跡的に回復し、養蜂業を営む姿が描かれている。彼の語る蜜蜂の世界は、石牟礼の「もう一つのこの世」さながらである<sup>2)</sup>。杉原ゆりの母はあなたの娘には「魂はない」と新聞に書かれ、「この子が草木ならわたしは草木の親、ゆりの親であるならそれでいい」(150)と語る。

江津野の爺様は孫の世話は自分たちが死んだら誰がするのかと案じながら亡くなり、後添えだったゆきは狂気かられて「あんたのところに嫁に来さなければ。元の体を返せ」と献身的に看病していた夫に言い、離縁されてしまう。原因が不明だった時期に解剖され、包帯で巻かれただけの娘の遺体を背負い、鉄道にもタクシーにも乗車を拒否され、線路をとほとと歩く母親など、患者とその家族の過酷な状況を描いたエピソードには事欠かない。

その一方で、診察する医師に対して患者が思いやりを示す場面もある。「患者たちは、先生方のヒューマニズムや学術研究を、いたわっているのに

ちがいなかった。この、わたしの生まれ育った水俣という土地には、昔からたとえばそんなふうに、遠来の客をもてなすやり方がいろいろとあるのである」(35)と石牟礼は語る。しかしその医者が、学問的な関心のみで患者を診察していることを感じ取れば、「五体不自由なこの人びとが発散するあの不思議なやさしさは消え失せて」(35)しまうのである。『奇跡の脳』で同様のことが語られているのは興味深い(ティラー 118-119)。右脳、つまり知性の働きが活発でなくなると、人間は相手の感情面への感受性が鋭くなるのであり、相手が自分のことを本当に思いやってくれているのか、単なる見せかけやデータ集めに役立つとしか見ていないかどうかが敏感に分かるという。それはまた大井玄の『痴呆老人』の見る世界』をも思い出させる(60, 65)。人間のコミュニケーションが、決して伝達する言葉の内容だけでなく、発話者の感情面も含めて成り立っているし、受け止める方にもそれは充分伝わるものであるという当たり前の事実を、これらのエピソードは思いださせる。

また大阪のチッソの株主総会に乗り込んでゆくためにご詠歌を練習するエピソードがある。ろくに練習をせずに着るものの心配をする女たちに師匠は「着てゆく着物の心配でもしよって、なんの上手になろうか。しわくちや婆あのかせしよって——。…<sup>あかぎもん</sup>赤着物の、<sup>しろぎもん</sup>白着物のちゅうことばかり心配せずと…まことに女どもというものは、済度しがたいもんじゃ」と説教する。それに対して婆さまたちは「さしうつむいて心の中で、(白着物ちゅうことはいうたが、赤着物ちゅうことは、誰も言わんじゃったもね)」と思っている」(303)のである。

これらからあぶり出されるのは自然と共に生きる人々の暮らしの豊かさであると共に庶民の知恵、まともな感覚、謙虚さ、基本的な善悪の感覚、そしてユーモアセンスなどである。

近代に於いて失われた素朴な共同体は、しかし実は様々な闇を抱え込んだものでもあった。すなわち理想的な友愛に満ちた共同体とはもともと幻想の共同体としてしか存在していないのである。ただ、例えばチッソに普通の生活を奪われる前には「もうひとつのこの世」は現代よりはずっと近づきやすかったのは事実である。

「もうひとつのこの世」は石牟礼が『苦海浄土』中で使っている言葉である。「いのちの契約書」<sup>3)</sup>がつくられた昭和三十四年十二月を「死者たちの

もどってくる年月の一里塚」と呼び、石牟礼はそれを乗り越えて近づく人びとの気配を、「墓の中の胎児たちの髪がのびる気配」とともに感じる。そして次のように語る。「…事件発生の頃の闇の中への道がそのあたりからひらかれる。／さらなる闇のこちらにあってわたくしのゆきたいところはどこか。この世ではなく、あの世でもなく、まして前世でもなく、もうひとつの、この世である。…／この世ではないもうひとつのこの世とはどこであろうか」(247)と。「もうひとつのこの世」について渡辺は、この世を根底から支える非日常の世界であり、そこへ近づくには呪術師やよそからやってきた客人の助けがいると言う。「現にこの世にある世俗的な生活の彼方に、その始原ないし根元をなす隠れた次元」があり、それをなくすと「農民や漁民としての現世の世俗生活も、存在の根底を失うような」世界であるという(渡辺 198)。

水俣病に破壊された人々の望んだことは、特別な栄華などではない。有機水銀に破壊される以前の体を、生活を取り戻すことである。普通の人として、普通に生きることである。それも有機水銀に傷めつけられていない、自然の恵みの中で、である。「ゆき女聞き書き」の中で坂上ゆきは語る。「うちはもういっぺん、元の体になろうごたるばい」(85)

ルポルタージュや「聞き書き」的な作品には、優越者の視点から描かれたものが往々にして見受けられる。書く人、記録する人が苦しむ人たちを実は密かに見下しているのである。石牟礼にはそれが無い。冷静に見つめながらも、水俣病に苦しむ人たちに寄り添って、あるいは乗り移って、乗り移られて書いている。「対象を客観的に分析したり、理論化してゆく社会科学などの知では到達できない深さ、高さまで跳躍できるような知のあり方と表現方法に、石牟礼さんの文学の魅力がある」と岩岡は述べている(『不知火』215)。ここまでは割合よく指摘されることである。実はもう一つ大事な点が存在する。それは石牟礼が読者に対しても決して優位に立とうとはしていない、ということである。「あなたたちは知らないだろうから教えてあげます」ではない、「ねえねえ聞いて下さい。こんな大変なことがあったのですよ」という風なのである。表現者が苦しむ人たちとも、それから我々読者とも同じ平面に立っている、それがこの作品の大きな力となっているのは確かである。石牟礼はこの小説は自らに向けた悲歌であり、「自分は役に立たない人間であると、思い聞かせるために」書いた(『不知火』33)と言う。

この石牟礼の語りを、往復書簡の中で多田富雄は「姉性」と巧みに言い表している。それは「母のような普遍的なもの」ではない。「全部を含みこんでしまうような絶対的な母性ではなく、同じレベルの実存的な『自己』の一部として共感し、ともに涙を流して苦しむ存在」、「身近の存在としての優しさ」をもつこと、それを多田は「姉性」と呼んでいる（石牟礼・多田 53-54）のである。

「ねえねえこんなことがあったのですよ」の先にあるものは、近代以前の言語であり、理性に切り分けられる以前の世界の中で生きる人の心の表白、生きることの実感を、それが近代と衝突してしまったという事実を、近代以降の側から、近代以降の言葉で、不完全ながら描きだそうとする試み、苦闘である。石牟礼の語る内容ではなく語ろうとする行為そのものが、近代への告発・呪詛となっている。ここに語り得ぬものを語ろうとする営為の極北に至った一表現者のわざがある。

石牟礼の表現・言葉そのものが弱者・虐げられてきた人々の存在・生活の中での実感を描き出すことによって、近代批判、文明批判となっている。そこに『苦海浄土』が世界文学たるゆえんがある。そこにおいて『苦海浄土』はウルフらの作品と同様、世界そのものを直接理解できるような資質を備えているのである。

言葉にならないものを、渡辺の言う「もうひとつのこの世」を言葉にしようとするとき、秩序だった言葉、文法に合った行儀のいい言葉では間に合わなくなる。そこからあふれ出し、こぼれおちて行くのはむしろ当然のことである。ここで石牟礼はジェームズ・ジョイスやウルフや、ガルシア・マルケスにおのずと近づくことになる。この世から意識が反りかえてしまうものとしての人間、生きること自体の痛々しさ、つらさ、言葉の虚しさ、言葉をつくしてもコミュニケーションが成り立たないこと、存在の裂け目の汀に生きる人間、それらの果てに、それらゆえにこそ幻想を見てしまうこと、希望という病、あるいは病としての希望、まさに世界そのものの裸形—それらを表現したのがこの『苦海浄土』なのである。それは、近代と前近代、文明とそれ以前がぶつかったからこそ見えてくる世界の本質である。土俗的世界は決して美しいだけの世界ではないし、個が全く相互に融け合う世界でもない。そして石牟礼がその光と影の双方を含めて描き出せたのは、その世界の外側に立つ存在だからに他ならないのである。



#### 4. ウルフの *To the Light House* との比較

石牟礼はいわれなき女性差別に苦しんだ作家でもあるが、一方のウルフも幼少時の異父兄による性的虐待に加え、女性差別に苦しんだ作家である。二人はまた表現について極めて意識的である点も共通である。1969年に一冊の本としての出版を見た『苦海浄土』には、方言を生かした語りや、自然と共に生きる人々の暮らしをそっくりその感性ごと掬いあげ、言語化の難しいはずのその全体を言語化しえている不思議な世界が展開している。また1927年出版の『灯台へ』は実験的な手法で何気ない日常を描き、「10余年の歳月は一日に凝縮され得る」し、「逆に一日がまた10余年の時を内包」していること、そして「多くの具体的な日常生活の描写が、同時に象徴的な意味をもち併せ、人生の意味が問われている傑作」（窪田 19）なのである。また「言語では掬いきれないものを視覚的イメージでとらえることに成功」（窪田 89）した作品でもある。それらを通じて、個人の私的な生活の背後にある第一次世界大戦前後の社会問題、また国家や戦争に翻弄される人々の内面に生起する事どもを、ウルフは見事な筆致で描き出している。

前述のように、石牟礼の批評書『近代への呪術師』のタイトルがいみじくも表しているように、石牟礼はいわゆる「近代」以前の様々なものに強い親近感を持ちつつ育ったのである。一方ウルフは文明を支える論理的思考や19世紀の伝統的な表現法に違和感を覚え、ノンをつきつけた。このことは今から30年前に中村雄二郎が『臨床の知とは何か』の中で、

「近代科学の三つの原理、つまり＜普遍性＞と＜論理性＞と＜客観性＞が無視した＜現実＞の側面を捉えなおす重要な原理として＜コスモロジー＞と＜シンボリズム＞と＜パフォーマンス＞、即ち＜固有世界＞、＜事物の多義性＞、＜身体性をそなえた行為＞が大切であり、個々の場所や時間のなかで、対象の多義性を充分考慮に入れながら、それとの交流の中で事象を捉える方法。＜経験＞が大きな役割を果たす。（9-10）

と語っていたことを思い出させる。今では普遍性、論理性、客観性の絶対的優位への疑問視、そして現実を捉えなおすために固有世界、事物の多義性、身体性をそなえた行為が重要視されるのは常識になっている。ウルフは



20世紀の初めにその境地に辿りついていたのであり、50年後に地球の反対側で石牟礼がやはり同じ地平に至ったのである。

彼女たちにとって女であることは恵みであった。女であるために抑圧され、苦しみ、苦しんだために見えたのは、論理性や文明の裏にあるもの、それらが切り捨ててきたものであった。文明が不要物として切り捨てたもののなかにこそ、守るべきものが潤沢に潜んでいた、いや潜んですらいなかった。それらはもともとそこにあった。ただ人々に見えなかった、感得されなかったのである。

Hermione Lee はペンギン版『灯台へ』のイントロダクションで、次のような確な解説をしている。Mrs. Ramsay の息子 James によれば父の掟の支配する以前に奇跡の庭園エデン、もしくはアルカディアが存在した。そこでは人は普通のトーンで話し、また彼の母だけが「真実を語った」と言う。また娘 Cam も母のことを思い出した、として Lee は次のように続けている。

Cam, too, remembers her mother speaking a rhythmical and nonsensical nursery language of mountains and gardens to send her to sleep, a language which has become a foreign tongue in the adult world but which can be recapitulated in dream or solitude. The novel's task is to make its new language re-embody — through rhythm, images and shapes — that first, vanished language. (xxxviii.)

父の掟の支配する以前の世界で話される山々や鳥の言葉とは、石牟礼の「文字＝知識が構築する近代的な世界像が決してとらえることのできぬ」世界を生きる人々の言葉（渡辺 94）そのものであり、「リズムと、イメージと形象を駆使した新しい言語を通じて、その原初の、失われた言語を蘇らせる」ことこそ石牟礼の目指したことでもある。ここに、ウルフと石牟礼との本質的な共通点が存在する。

『もうひとつのこの世——石牟礼道子の宇宙』の中で、渡辺京二が中井久夫を援用して、面白い指摘をしている。中井の『分裂病と人類』では分裂病（今で言う統合失調）と鬱病という精神病の二大類型の根拠を、採集狩猟社会から農耕社会へという人類史の展開のうちに位置付けている。そして S（統合失調）親和気質の人は「『身近な人物のほとんど雑音にひとしい表現筋の動きに重大で決定的な意味をよみとり、それにしがたって思い切った行

動に出る』。つまり相手の初動に振りまわされやすい。かすかな徴候から全体的な意味を読みとってしまい、まだ現前していないものを現前しているかに認知する。…石牟礼文学において世界が気配と兆候と予感にみちみちていること…[S 親和気質者による]世界認知の性格を帯びている…。[このような]認知特性…かすかな草の乱れや風が運ぶ香りからえものの存在を感知し、どの枯草を掘れば水分の多い地下茎が得られるか見分けます。つまり微妙な兆候をひろいあげる抜群の能力を持っております。ということは採集狩猟民族として生きるために、ひとはS 親和気質でなければならぬことになります。石牟礼文学の岩殿など…異人たちがなにゆえあれほど光彩を放っているのか…彼らは脅迫的な農耕文化以前の心性、つまり兆候と気配に生きる心性のもち主であるゆえに、半ば山人と化しているのではありますまいか」(83-85)

このような兆候と気配への感受性は『灯台へ』の随所にも見受けられる。例えば冒頭には気配を描いた“*But something moved, flashed, turned a silver wing in the air*”(24)という箇所がある。またウルフは見たものを見た通りに描くことの難しさについて画家 Lily Briscoe の口を通して次のように表現している。“*She would not have considered it honest to tamper with the bright violet and the staring white, since she saw them like that, fashionable though it was, since Mr. Pounceforte’s visit, to see everything pale, elegant, semi-transparent*”(23)と。それを率直に表現することの難しさについては‘*But this is what I see; this is what I see*’(24)と述べている。

自然と向き合う人間については

‘It was as if the water floated off and set sailing thoughts which had grown stagnant on dry land, and gave to their bodies even some sort of physical relief. First, the pulse of colour flooded the bay with blue, and the heart expanded with it and the body swam, only the next instant to be checked and chilled by the prickly blackness on the ruffled waves…

… both of them looked at the dunes far away, and instead of merriment felt come over them some sadness – because the thing was completed partly, and partly because distant views seem to outlast by a million years (Lily thought) the gazer and to be communing already with a sky which beholds an earth entirely at

rest.’ (24-25)

と、打ち寄せる波を眺めることで心が解き放たれ、ほっとする身体感覚を、そして人々の心が悠久の自然の前の mortality の認識から生じる悲しさに浸されることをも描いている。

気配を見ること、表現への研ぎ澄まされた感覚、自然との一体感と命のはかなさの意識—それらはすべて石牟礼と極めてよく似ているのである。

## 5. 結論

更にリーが『灯台へ』について述べている “her deep sense of the cruelty and sadness of being alive are at the bottom of the whole novel” (xxxix.) という点でも、石牟礼はウルフと共通している。石牟礼はウルフの影響を受けているわけではない。片や西洋の知的家庭出身の知の最先端に位置する洗練された作家、片や現代文明の犠牲にされて消え行きつつある素朴な漁民・農民の心に映る心象風景を内側から描いた、田舎の主婦から作家になった人である。その二人の作家の行き着いたところが本質に於いて非常に似通っている。それは何を意味するか。一つは共時性ということである。『苦海浄土』と『灯台へ』という二つの作品に絞って考えてみると各々初版は1976年と1927年なので出版年には約50年の開きがある。だが現代物質文明への疑問をウルフも大いに抱いていたのであり、その意味ではよく似た問題意識を共有していると言えるだろう。

もう一つ考えられることは、片や前衛、片やはみ出しものではあっても、「正統的」なりアリズムではとらえきれない世界と人間を両者とも描き出そうとしていることである。それはとりもなおさずこの二つの作品が、池澤の「世界文学」の定義である、「世界そのものを理解できる資質」を備えているということである。さらに、石牟礼の「言葉にからめとられる以前の認識で生きる人々の世界」、ウルフの「父の掟支配以前の世界」は現代文明にからめとられて生きている我々一人ひとりの中にも確実に存在しているのである。それが『灯台へ』同様『苦海浄土』も世界文学たるゆえんである。石牟礼の描き出す、水俣病発生以前ののどかで牧歌的世界は、渡辺が鋭くも指摘するように、現実には存在しなかった世界であろう。幾分かはそれに似た世界はあったのかもしれないが、素朴な農村、漁村はまた嫉妬や世間の冷たい

目や監視の目に取り囲まれ、ことによそ者や女は窒息しかねない世界でもある。それでも春は来る。野山にはそして不知火の海には豊かな世界が広がっている。あり得たかもしれない、豊饒な恵みに満ちたひたすら明るい世界、もうひとつのこの世がこの上なく美しいのは、それが幻想であるという痛みを伴った明確な認識と、生きてあることの悲しみの深い感覚に根底を支えられているからである。そしてその幻想の美しい世界を我々読者に示してくれている石牟礼の営為こそが我々に救いと希望をもたらしてくれるのである。

注

- 1) 「苦海」は弘法大師和讃より。『苦海浄土』9頁、同「解説」760頁参照。
- 2) その後田上は奇跡的な回復を遂げ、一時は自給自足的な生活をしていた。しかしその後病状が悪化し、2002年に死去している。
- 3) 新日本窒素水俣工場と水俣病患者互助会が取り交わした“見舞金”契約書のこと。「子供のいのち年間3万円／大人のいのち年間10万円」等と記されている。

《テキスト》＊引用ページ数は文中の（ ）内に数字で示した。

石牟礼道子『苦海浄土』河出書房新社 2011年

同上『椿の海の記』（初版 1976年）河出書房新社 2013年

Virginia Woolf, *To the Lighthouse* (London: Penguin Books, 2000).

《引証資料》＊引用ページ数は文中の（ ）内に数字で示した。

池澤夏樹『池澤夏樹の世界文学ワンダーランド』〈知る楽シリーズ2009年10-11月〉

日本放送出版協会 2009年

同上「水俣と言葉の力」『石牟礼道子一魂の言葉、いのちの海』河出書房新社 2013年 20-35頁

石牟礼道子・多田富雄『言霊』藤原書店 2008年

同上『蘇生した魂をのせて』河出書房新社 2013年

石牟礼道子、渡辺京二他『不知火-石牟礼道子のコスモロジー』藤原書店 2004年

同上『石牟礼道子——魂の言葉、いのちの海』河出書房新社 2013年

上野千鶴子『〈おんな〉の思想』集英社インターナショナル 2013年

大井玄『「痴呆老人」は何を見ているか』新潮社 2008年

開沼博『「フクシマ」論——原子力ムラはなぜ生まれたのか』青土社 2011年

窪田憲子編著『ダロウェイ夫人』 ミネルヴァ書房 2006年

中村雄二郎『臨床の知とは何か』 岩波書店 1992年

西村肇・岡本達明『水俣病の科学』 日本評論社 2001年

羽生康二『近代への呪術師・石牟礼道子』 雄山閣 1982年

ライト, ロナルド『暴走する文明』 星川順訳 NHK 出版 2004年

渡辺京二『もうひとつのこの世—石牟礼道子の宇宙』 弦書房 2013年

渡辺京二, 岩岡中正「石牟礼文学をどう読むか—ロマン主義としての石牟礼文学」

『不知火』 石牟礼道子, 渡辺京二他 藤原書店 2004年 214-228頁

Kurahashi, Yuko. 'Creating a Tapestry of Voice and Silence in Michiko Ishimure's *Kugai jodo* (*Paradise in the Sea of Sorrow*)'. *Journal of Narrative Theory* 33. 3 (Fall 2003): 315-334.

Lee, Hermione. 'Introduction' to *To the Lighthouse*. London: Penguin books, 2000.

Nicolson, Nigel. *Virginia Woolf*. New York: Penguin Books, 2000.

Woolf, Virginia. *Virginia Woolf: Selected Diaries*. Ed. Anne Oliver Bell. London: Vintage, 2008.